

# C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

現代イタリア事情 -Italia oggi- 第 15 回

## \* リラとユーロの話 \*

立元 義弘

2002 年 1 月 1 日—この日は西欧 12 国で欧州単一通貨、ユーロの実際の流通がスタートし、イタリアでも 140 年間にわたって慣れ親しまれてきたリラに別れを告げた日です。そして、この日からイタリア語ではエウロと発音される新通貨が国民の毎日の実生活上でもデビューし、2 か月間の両通貨併用期間を経て何を買うにもどのようなサービスを受けるにも全てユーロが使われるようになったのです。

それから 12 年、この間加盟国も増え、今年の 1 月からは新たにラトビア(イタリア語ではレットニア Lettonia)が加わって、現在では EU28 カ国のうちユーロランドと呼ばれる 18 カ国の共通通貨としてユーロはすっかり定着しましたが、当時、私はミラノに住んでおり、前年 12 月から銀行で売出した各種ユーロ硬貨を詰め合わせたスターターキットなるものをリラで購入(両替)し、その日の来るのを待ったことを思い出します。まさしくこの歴史的な変化の様を現場での生活者として体験できた訳です。

リラと言えば 1980 年頃までは紙幣や硬貨の供給が追い付かず、銀行が独自の金券を発行したり、スーパーでは買い物の釣銭代わりに飴玉が戻ってきたり、ジェットーネと呼ばれる公衆電話用のトークンが 200 リラ玉として代用されていたりと、今となっては驚くようなことが行われていました。また、当時のリラは国際的にも弱い通貨の代表のようなもので、その価値はどんどん目減りして行く一方でした。それまでもデノミの実施が何度か囁かれてきていたリラは、とにかくケタが大

きうえに当時の最高額面紙幣の 10 万里ラ札はまだあまり出回っていなかったため、1986 年、私がミラノ赴任直後に現金でもらったリラでの給料袋は立てれば立つほどの分厚さでした。(もちろん、減ってゆくのも早かったのですが。)

そしていよいよリラもその役目を終えることとなり、ユーロとの交換レートは 1 ユーロ = 1936.27 リラと定められました。ユーロ流通開始直後は、やはりモノの価値に対する頭の中の物差しは昨日まで使い慣れたリラですから、何事においても瞬時にユーロでのモノやサービスの値段が一体何リラであるのか換算しなくてはなりません。スーパーや商店などではしばらくの間、ユーロ・リラの両通貨併記の価格表示でしたし、ユーロコンバーターなる通貨換算機能を備えたポケット電卓なども流行りましたが、自分も含めた多くの人々にとって、完全にユーロモードの頭に切り替わるのに要した時間は決して短くはありませんでした。



【ユーロ価格の下にリラ価格を併記】

その間、常にユーロでの表示価格を見ては何リラになるのかを計算し、リラで考える物品の価値をユーロにするといくらになるのかを考える作業を一日に何度となく行うのですが、この機に乗じた便乗値上げもそこそこで起こりましたから、モノやサービスの新しいユーロ価格に人々は常に目を光らせておく必要がありました。

しかし、早々に 1936. 27 などというややこしい数字は忘れて、人々の頭にはざっくりと 1 ユーロ = 2000 リラという目安を持つようになります。しかし、1936. 27 リラと 2000 リラの間には 3%強の差があり、この目に見えないインフレに人々は段々と麻痺してゆくことになるのです。

こうして、徐々に人々の頭の中の尺度がリラからユーロに切り替わってゆくに伴い、今度はリラが忘れ去られるのも早く、同時に 1 ユーロ = 2000 リラという目安もいつの間にかどこかへ行ってしまい、気が付けばとんでもないインフレが進行することとなりました。そして、リラの晩年期と現在のユーロでの物価を比べると、その換算レートは 1 ユーロ = 1000 リラという驚くべきレベルに達しています。

1990 年前半頃までは一杯 1000 リラだったエスプレッソコーヒーは今では 1 ユーロ、ミラノの地下鉄・バス切符も同様に 1000 リラだったものが、ユーロ導入後いち早く 1 ユーロとなり、現在は更に値上がりしてローマやミラノの大都市では 1.5 ユーロです。レストランでの外食にしてもリラの時代には 5 万リラ、ちょっと気の利いたところでも 8 万リラも払えばフルコースが食べられたのですが、今はそれが 50~80 ユーロ、下手をすると 100 ユーロです。まさにこの十数年で物価が倍に、モノによってはそれ以上の値上がりです。給料の方も同じことが起こってくれていれば問題はなかったのですが。。。

ともあれ、リラからユーロに変わってから既に 12 年、通貨としてのリラは人々の生活からすっかり忘れ去られた存在になってしまいましたが、イタリア語の中では今もリラは健在です。但し、その使われ方はかわいそうなもので、例えば“Non ho una lira.”(一文無した。)、 “Non vale una lira.”(一銭の価値もない。 ) という具合に、リラは価値のないものの例えとして使われるのみですが。(そう

いえば、日本語の“文”も“銭”も同じ形で生き残っていますね。)そして、お金のリラの方も、筆筒の奥に眠っていた古いリラ紙幣が見つかったからと言って銀行に持ち込んでも今となってはユーロへの交換に応じてもらうことはできず、本当にその価値はゼロになってしまいました。

この女性名詞リラはさすがイタリア生まれだけあって、単数と複数の変化はきちんとルール通りに、una lira - cento lire と変化しますが、ユーロの方は文法通りにはゆきません。まず、euro ですから男性名詞となるのはよいのですが、複数形になってもイタリア語のルール通りに euri とは変わってくれず、euro は複数形になっても無変化で、1 ユーロでも 100 ユーロでも un euro、cento euro と、euro のままです。

まあ、ユーロ圏各国で使われる通貨なのだからイタリア語の文法を無理やり押し付けてもねと、euro が不変の単複同形であることを納得しても、補助単位のチェンテージモの方は、1 セントは un centesimo、50 セントは cinquanta centesimi ときちんと男性名詞としての単複変化をします。(もっとも、centesimo という単位は、もともと“100 分の 1”を意味する言葉で、ユーロのように新しく生まれた通貨の呼び名ではありませんが。)

話題をお金のユーロに戻しましょう。

ユーロ硬貨は 1 ユーロ、2 ユーロ硬貨に加えて、1, 2, 5, 10, 20, 50 の 6 種類のチェンテージモコインからなり、1, 2, 5 チェンテージモコインは赤銅色の銅メッキ、10, 20, 50 チェンテージモは主に銅を使った合金製で金色。そして、1, 2 ユーロ硬貨は中心部と外周部が金色と銀色のツートーンカラーの硬貨で、金色のニッケル黄銅合金が 1 ユーロでは外周部に、2 ユーロでは中心部に使われています。額面の表記されている側(裏面)は各国統一デザインで、額面の数字に欧州大陸の地図があらわされていますが、表面は製造年と 12 個の星以外は発行国それぞれ個別のデザインですから、どの国で製造・発行されたものかがわかり、国ごとのコインをコレクションする楽しみもあります。更にイタリアの場合、各コインそれぞれに異なるモチーフが採用されており、コロッセオ(5 チェンテージモ)、ポッティチェッリのビーナスの誕生(10 チェンテージモ)、ダ・ヴィンチの有名なヴィトゥルヴ

ィウスの人体図(1 ユーロ)、ラファエッロ作のダニエルの肖像画(2 ユーロ)などとなっています。

また、EUには加盟していませんが、バチカンとサンマリノもユーロを自国の法定通貨としており、独自のコインを発行しています。バチカンのコインには在位の教皇の肖像画がレリーフされることになっており、2013年3月に即位したフランチェスコ現法王のコインも既に鑄造されていますが、法王の空位期間に鑄造されるものはバチカンの紋章が彫られています。



【バチカンのユーロコイン】

一方、紙幣の方は、額面が5, 10, 20, 50, 100, 200, 500 ユーロの7種がありますが、コインのように国ごとの違いはなく、すべてデザインが統一されています。あしらわれているデザインは様々な時代の建築がテーマで、表面が窓や門、裏面は橋ですが、特定の国を想起させるような、はっきりそれとわかる描かれ方はされていません。表面には欧州連合旗の隣に欧州中央銀行の略称が、そしてその下には欧州中銀総裁のサインが印刷されています。裏面には2か所に個別の通し番号が印刷されており、最初のアルファベットで発券国がわかります。因みに、イタリアはSです。

ユーロ紙幣には透かしやホログラムをはじめとする数々の偽造防止対策が施されていますが、イタリアでも2012年には約6万9千枚(340万ユーロ相当)の偽札が押収されています。2008年には何と30万枚(1580万ユーロ相当)が見つかり、以降年々減少してきてはいるのですが、2013年1~6月期には前年の同じ時期に比べて+60%(4万8千枚)と再び急増しています。興味深いのは、ピークの2008年に最も多かった偽札が50ユーロ札で全体の75%だったことに対して、2012年では約半分が20ユーロ札、50ユーロ札は25%に低下していることです。しかし、この変化が

昨今の経済危機の影響によるものかどうか、その真相はわかりません。

こうした偽造防止策の強化を主な目的として、更に数々の最新先端技術が駆使された「エウロペシリーズ」と呼ばれる新紙幣の発行が順次始まっており、昨年5月に登場した5ユーロ札を皮切りに、今年の1月13日には新たに10ユーロ紙幣が発表され、9月23日から市中に出回り始めることになっています。



【10ユーロ新紙幣(左)と旧紙幣(右)】  
(大阪大学講師、元パナソニックイタリア社長)

## イタリアンレストラン紹介

～心齋橋～

### ピエトラサンタ

ヨーロッパの酒蔵のような、アーチ状の造りになっている、落ち着いた店内です。

富山湾直送の魚介類をはじめ、日本各地の生産者こだわりの食肉や野菜、素材を生かし、添加物を使わないイタリアンです。

特典: (日本イタリア会館会員証をお持ちの方)  
コーヒー・紅茶サービス

住所: 大阪市中央区心齋橋筋1-3-29

ミヤプラザ心齋橋B1

電話: 06-6241-1445

HP: <http://www.pietrasanta.jp/>



僕らをつなぐもの

フランチェスコ・デ・グレゴリー

国司 航佑

筆者が初めてイタリアに暮らしたのは、1998年のことである。それから15年以上が既に経過したが、いまだにその記憶は鮮明に残っている。が、残っているのは思い出だけではない。その一年間に会った人の中には、友人関係が今なお続いている人も多くいる。横浜に住む高校時代の同級生に会わなくなって久しいことを考えると、これはなかなか不思議なことである。大袈裟な物言いかもしれないが、イタリアの友人とは魂の結びつきのようなものを感じるがある。彼らと筆者とは、共通の文化的基盤を有していないから、習慣や身分といった表層的な面を取り払った上で、より深いところでの相互理解が求められるのかもしれない。そのような「理解」に達したとき、少なくとも筆者の側では、時空を超えた強い結びつきを感じるようになる。

この種の結びつきを獲得しようとするとき、言葉に頼らないコミュニケーションの手段があると心強い。ぬかるんだグラウンドで一つのサッカーボールを奪い合う。同じ大理石の彫像を違う角度からデッサンする。各々が楽器を持ち寄ってそれらを共鳴させる。このような場面では、筆者は彼らと対等の関係を作ることができる。翻ってイタリア語がそこに介在するとき、筆者は自分がお客さんとして扱われているように思われて仕方がない。例えば、ベルルスコーニ政権下で教育改革を進めたジェレミーニや民主党内外で支持を集めつつあるレンツィについて、筆者の友人は、「イタリア語も話せない」無教養の政治家として彼らを嘲笑う。ところが、彼らより遥かに拙いイタリア語を披歴する筆者は、「多くのイタリア人より優れたイタリア語を話す日本人だ」として褒めてもらえる。筆者が彼らと同じ土俵に立っていないのは明らかである。

とはいえ、お互いの文化に対する強い関心がなければ、やはり「魂の友情」は成立しにくい

ようである。筆者の念頭にある「魂の友人」は、それぞれの仕方で日本に興味をもってきている。むしろ筆者の方も、イタリア文化をこよなく愛している。お互いが異なる存在であるから通じ合うことは難しい。だが、理解できないことを前提としつつも、なおも理解を求める。これは異文化交流の鉄則であるが、人間関係一般にも適用できる普遍的な法則なのかもしれない。

ところで、筆者が「イタリア文化」と言ったとき、それは生きたイタリア文化を意味していた。なぜこの点を強調するかというと、日本のイタリア文化愛好者、なかんずくイタリア文学の研究者にあっては、「生きたイタリア文化」が軽視されがちであると筆者には思われるからである。例えば、イタリア映画の好事家のケースで考えてみよう。もし彼が、フェッリーニやヴィスコンティの名作を偏愛しつつも、その一方でイタリアの現代映画にまったく関心を示さなかったとする。その場合、彼にはイタリア人と「魂の付き合い」をすることは期待できない。何故ならこの人物は、「生きたイタリア文化」を無視することで、同時にその友人の一部を無視することになってしまっているからである。

筆者の個人的な体験からすると、「生きたイタリア文化」の中には、「魂の友情」を育むためにひときわ大きな効果を発揮するものがある。それは、イタリアン・ポップスである。イタリアには、カンタウトーレと呼ばれる歌手がいる（直訳すればシンガーソングライターとなるが、その実像は日本語でいうフォークシンガーに近い）のだが、特に彼らの作品が筆者とイタリア人との共通の関心事となりやすい。パッティスティ、デ・アンドレ、ダッラ等々、その例を挙げようとするればきりががないが、我々にとってとりわけ重要なカンタウトーレが一人いる。ローマのカンタウトーレ、フランチェスコ・デ・グレゴリーがその人である。

15年前に知り合ったダーリオは、イタリアでできた初めての親友である。そのダーリオがいつしか贈ってくれたCDの中にデ・グレゴリーの曲が入っていた。曲のタイトルはLa storia（歴史）、冒頭の歌詞からして素晴らしい。“La storia siamo noi, nessuno si senta offeso, siamo noi questo prato di aghi sotto il cielo”（歴史とは、「我々」である——誰も傷つかないように——「我々」すなわち空の下の

この松葉の野原である)。「歴史」と「我々」と「松葉の野原」——この突飛な単語の組み合わせが、行間に余韻を漂わせる。行間に何を読むかは、ダーリオと筆者で自ずから違ってくるのだろうが、同じ余韻を楽しんでいるという感覚は共有している。

デ・グレゴリーへと本格的に導いてくれたのは、5年以上前に日本で知り合ったクラウディオである。彼は、筆者がサッカーを偏愛することを知って、「68年組サッカー集団」(Leva calcistica della classe '68)という曲を教えてくれた。ちなみにこの曲は、この連載で既に一度取り上げている。その時も述べたが、サッカー少年の物語を描写したこの曲のサビの歌詞は、サッカー経験者の心に非常に強く響くものである。“Nino non avere paura di sbagliare il calcio di rigore. Non è mica da questi particolari che si giudica il giocatore. Il giocatore lo vedi dal coraggio, dall' altruismo e dalla fantasia” (ニーノ、ペナルティーキックの失敗を恐れることはないよ。そんな些細なことで選手の価値が決まるなんて、そんなことは全くない。選手の評価を決めるのは、勇気、他人を尊重する心、そしてファンタジー(創造力)なんだよ)。



【PKを外したファンタジスタ、バッジョ】

イタリアで通っていた高校の、英語の先生だったブルーノは、「リンメル」(Rimmel)という歌が好きだった。今はもういない彼女に語り掛けるセリフ、「そして僕は、自分のアリバイと君の理由を混同する」(E confondo i miei alibi e

le tue ragioni)は字義通りとればミステリアスに響く。しかし、イタリア語を話す人間は、“ragione”(理由)という単語を使った成句“avere ragione”(理由をもつ⇒正しい)をここで想起する。“le tue ragioni”という単語の組み合わせは“tu”が“ragioni”を持っていることを示すから、「正しいのは君だ」というセリフがここから浮かび上がってくる。一方、「僕」は「僕」でアリバイを持っている(間違っていない)。主人公の頭の中で、この2つの要素がこんがらがってしまっているのである。この歌詞が特にわが心の琴線に触れるのは、過去に恋人を失って「間違い探し」をした経験があるからだろうか。

高名なダンテ学者であるクラウディオ(上のクラウディオとは別人)と心を通わず友人になれたのも、デ・グレゴリーのおかげかもしれない。ナポリの一角をともに散歩していたとき、筆者はデ・グレゴリーの代表曲「大砲女」(La donna cannone)について尋ねた。僕はこの歌が好きなんだけれども、歌詞の意味はよく分からないんだ。イタリア人(クラウディオ)は、意味を理解しているの?するとクラウディオは答えた。いや分からないね、というか、分からないからこそいいんじゃないか。そして彼は続けた、否、歌った。“Vado? Vado?.....♪Butterò questo mio enorme cuore fra le stelle un giorno♪”(行くよ?行くよ?.....♪この巨大な私の心を星々の合間に投げ込むわ、いつの日か♪)。アカデミシャンにあるまじき底抜けの陽気さは措くとして、意味が分からないからこそ良いという彼の確言は示唆深いものであった。あの頃から筆者は、イタリア語の研鑽を積み、また「大砲女」を聞き続けてきた。「この曲は意味が分からないからこそ良い」という確信を自ら持つには至っていないが、意味が分からなくても良さは分かるとは言えるようになった。

ナポリの親友マウリツィオもまた、イタリアン・ポップスのファンだった。知り合ってから、我々は音楽の話で通じ合った。彼は、筆者が当時あまり詳しくなかったルチョ・ダッラの曲を教えてくれた。筆者は、70年代の日本フォーク・ロック界の革命児、はっぴいえんどを彼に紹介した。そして、ことあるごとに、彼と彼の友人のフェルディナンドとで、フォークソング

を歌った。我々が特に盛り上がったのは、デ・グレゴリーの“Generale”（大将）という曲を歌ったときである。これは、メロディもコード進行もとても単純な曲であり、ギター一本の伴奏でそれなりの雰囲気を出し出すことができるから、定番の宴会ソングになっているらしい。

「大将」は、悲惨な戦争の風景を叙情的に描いた物語である。その歌詞においては、名詞と形容詞の組み合わせ方が斬新であり、また独特なふしの切り方はそれを一層際立たせている。冒頭の一節を1行ずつ分けて考えてみると、1行目が“Generale, dietro la collina”（大将よ、丘の後ろには）、2行目が“ci sta la notte crucca e assassina”（ドイツ（スラブ）野郎の殺人的な夜が待っている）、3行目が“e in mezzo al prato c'è una contadina”（そして野原の真ん中には一人の農婦がいる）、4行目が“curva sul tramonto e sembra una bambina”（その農婦は夕陽を背に背中を丸め、少女のように見える）、5行目が“di cinquant'anni e di cinque figli”（50歳で、5人の子供をもち）、6行目が“venuti al mondo come conigli”（その子供たちはウサギのような格好でこの世に現れ）、7行目が“e partiti al mondo come soldati”（兵士として世界に旅立ち）、8行目が“e non ancora tornati”（そして未だ帰ってこない）となる。

この一節は、実は長い一文からできている。そしてその同一の文において、「農婦」という語と「子供」という語とにそれぞれ一連の修飾語が続くことに拠り、残酷な戦争を暗示する言葉と牧歌的な風景を描く言葉とが交互に現れるようになっている。3行目から5行目にかけての、「少女」のように見える「50歳」の「農婦」という撞着語法（意味の相対する語を敢えて並置させる修辞技法）的な単語の組み合わせは、非常に美しいイメージを喚起する。6行目と7行目は、意味内容からも文法構造からも対称を成しているが、その両者において同一の単語“mondo”（拙訳においては、「この世」と「世界」とに訳し分けてしまったが）が使われているのが心憎い。全体を通して韻が踏まれており、それぞれ、1行目から4行目までは“ina”、5行目と6行目は“igli”、7行目と8行目は“ati”という語尾になっている。同一の脚韻によって結ばれた“figli”（子供）と“conigli”（ウサギ）、“soldati”（兵士）と“non ancora

tornati”（いまだ帰らない）は、それぞれ同じ雰囲気共有する語であり、前者は「母の傍を離れない（ウサギのように）怖がりの子供」、後者は「いまだ帰らない勇敢な兵士」というイメージを浮かび上がらせる。しかもこの2つは互いに対照的なイメージでありながら、同一の人物の前後を語っている。戦争の悲惨さを叙情的に語るために施された工夫は見事なものである。

以上、筆者とその友人とを繋ぐデ・グレゴリーの代表曲を紹介してきた。だが、実のところ、筆者が最も愛する作品はこれらではない。自由奔放な一人のイタリア人女性のことを歌った曲“Caterina”（カテリーナ）が、他のどの曲にもまして筆者の心を捉えて離さないのである。しかし、今回は残念ながら既に紙幅が尽きてしまったようなので、“Caterina”については別の機会にお話しできればと思う。



【2008年のデ・グレゴリー】

[図版の出典]

[http://sport.sky.it/sport/mondiali\\_calcio/2010/05/02/baggio\\_rigore\\_usa\\_94\\_sbagliato\\_per\\_senna.html](http://sport.sky.it/sport/mondiali_calcio/2010/05/02/baggio_rigore_usa_94_sbagliato_per_senna.html)

[http://it.wikipedia.org/wiki/Francesco\\_De\\_Gregori](http://it.wikipedia.org/wiki/Francesco_De_Gregori)

（元当館スタッフ）

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: [centro@italiakaikan.jp](mailto:centro@italiakaikan.jp)

URL: <http://italiakaikan.jp/>